



Title	中上級日本語学習者の会話における誤用 : 録音会話の誤用と学習者の自己訂正
Author(s)	東保, 登紀代
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学留学生センター研究論集. 2006, 10, p. 73-82
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50752
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中上級日本語学習者の会話における誤用

—録音会話の誤用と学習者の自己訂正—

東保 登紀代*

要 旨

本稿は、約二ヶ月間に渡り週一回ペアで行われた日本語中上級学習者のトピック会話の、教師による誤用訂正と学習者の誤用自己訂正を集計・分析したものである。その結果、学習者の誤用は文法の誤用が最も多いことが分かった。また誤用の具体例を見ると、誤用の分類項目の全てに渡って誤用は特定の誤用に集中していた。一方、学習者の誤用自己訂正は「語彙」の訂正率が最も高く「助詞」の訂正率が最も低かった。「語彙」では誤用数が多かった項目は、訂正率も高かったが、分類項目「文法」では多くの誤用があった項目の訂正率は逆に低かった。教師は学習者の誤用を毎週添削してフィードバックしてきたが、この間に学習者は間違いやすい「文法」に対する自己訂正がさほど行えなかったと言えよう。このことは正確な日本語運用には、学習者の誤用を訂正してフィードバックするだけでは充分とは言えず、間違いやすい具体的な「文法」項目や「助詞」を、その言語形式に焦点を当てて復習することがきわめて重要であることを示唆している。この調査により、全体としての中上級学習者が発話上間違えやすい言語項目、並びに個々人のそれを突き止めることができた。学習者のクラス在籍中に週ごとの誤用を集計するなら、彼らの日本語学習を効率的に援助できる。

【キーワード】中上級日本語学習者、会話、誤用、文法、自己訂正

1 はじめに

大阪大学留学生センター日本語研修コースには現在レベル別にA、B、Cの3クラスがある。最も上のレベルであるCクラスには、週ごとに9つの異なるトピックに関する日本事情について(1)読み、(2)講義を聴き、(3)討論する、というトピックシラバスによる「日本を知る」と題されたユニットクラス(以後、「日本を知る」と呼ぶ)がある。

筆者が担当したのは(3)討論する、のクラスである。クラス開講時のアンケートによれば、学習者のこのクラスでの目標として最も多かったのは「正確な日本語を話す」であった。小山(1996)が指摘するように、「初級期の学習者とは異なり、既にある程度の言語能力を持っている中級期の学習者は学習してもなかなか進歩を実感できない」。小山は学習者の自

己評価調査の結果、その傾向は学習者が「相手の反応を通してしか言語運用の成否を実感できない「会話力」において最も顕著であった。」と報告している。学習者の発話を教師が添削(誤用訂正)するだけではなく、学習者自身が自分の会話をモニターして自らの日本語発話の現状を知り、もしその中に間違いがあればそれを自己訂正することは、自立的な学習を促し、中級期の学習者が進歩を実感する機会を与えることになる。それは日本語学習へのモチベーションを高めるのに役立つと共に、「適切で正確な日本語」を話すようになるために効果的であると考えられる。

「日本を知る」(3)討論クラスでは学生はクラスメートとの会話を各自テープに録音し、それを自宅に持ち帰って聞く。そして気付いた間違いを訂正して次の週に教師に提出し、同時に教師から録音会話の添削を受け取る。さらに翌週、誤用部分の訂正が学習者自身で

* 大阪大学留学生センター非常勤講師

きているかどうかの確認クイズをする、と言う手順で授業を行った。

本稿ではまず、学習者15人の会話の、教師による誤用訂正の内容とその数を集計する。続いて学習者の自己誤用訂正の内容とその集計結果を示し、それを分析することによって、中上級学習者の会話における言語項目上の問題点とその解決方法を探る。

最後に録音テープ聴取から伝わる会話の雰囲気と学習者の会話ストラテジーを紹介し、今後の課題を考察する。

1-1 先行研究

日本語学習者の誤用訂正に関する研究としては、本郷（2003）が中級レベルの学習者同士による誤用訂正活動をグループ・モニタリングという観点から報告している。本郷によれば、学習者間の調整行動がみられ、協調的な相互行為が行われていたグループは、そうではなかったグループより文脈依存の高い項目にも訂正が見られた。

一方、学習者による誤用自己訂正については、石橋（2000）が日本語学習者の作文におけるモニターの働きを、産出した作文の自己訂正の分析からみている。その結果、（1）モニタリングによりおかしいと気づいた箇所はかなりの程度正確に自己訂正が可能であること、（2）自己訂正の水準は大半が表層レベルであり、テキストレベルに及ぶ訂正は殆どなかったこと、（3）自己訂正は日本語能力が関連しており、能力が高くなるほど適切な修正が行われていること、（4）作文力と自己訂正の頻度には有意な関連が認められなかったことが分かった。

学習者の発話中の誤用自己訂正の研究としては花城（1998）が中級4人、準中級2人の日本語学習者に対するインタビューによる調査を行っている。発話中の学習者の誤用自己訂正、及びインタビューの録音テープを文字化したものの自己訂正を縦断的にとり、それらを分析している。その結果、発話中に学習者が誤用に対して気づき、正しく訂正した割合は8.7パーセントであった。しかし、文字化した資料の中で気づいた誤用の訂正率は67.2パーセントであった。石橋、花城

に共通しているのは、研究対象が学習者の作文や文字化された会話文に含まれる誤用全体に対する自己訂正率ではなく、学習者が気づいた誤用に対する自己訂正能力である。また、花城の研究では誤用の分類が「名詞」「動詞」「形容詞」というように大まかなため、基礎的な文法学習を既に終えている中上級学習者に対しての実際の指導には役立て難い。

一定期間授業中に日本語学習者同士が行った会話に見られた誤用の全てを対象にした、誤用研究や自己訂正に関する報告は著者が調べた範囲では見当たらない。

本稿は適切で正確な日本語を話したいという中上級学習者の言語項目上の具体的な問題点を探り、それを克服するための試みである。

1-2 「日本を知る」クラスの概要

当センターの日本語研修コースCクラスの学生は、週5日、全15コマ（1コマ90分）の授業に出席しているが、Cクラスの学生専用のクラスは「日本を知る」の3クラスのみであり、「日本を知る」は次の5コマの授業から構成されている。

読解クラス	トピック関連知識と文法・語彙学習	2コマ 180分
口頭発表クラス	トピックに関する担当教師の講義とビジターセッション、口頭発表	1コマ 90分
討論クラス	関連データ読みとクラスメートとの会話 一般聴解と語彙学習	2コマ 180分

なお、「日本を知る」のトピックは「気候・地理・風土」「食べる」「家族」「住む」「環境」「女性（と男性）」「若者・教育」「大阪」「歴史」の9トピックである。期によってこの全部が会話の授業で取り上げられないこともある。20期は6回、21期は9回、22期は7回、会話を録音した。

2 調査対象および調査方法

2-1 対象

教師による誤用訂正対象者は、大阪大学留学生センターに平成16年4月から17年9月まで在籍した20期、

21期、22期Cクラス学習者のうちの15人（漢字圏：上級2人中級6人、非漢字圏：上級3人中級4人）であり、「自己訂正」を行った学習者は、そのうちの10人（漢字圏：上級1人中級5人、非漢字圏：上級1人中級3人）である。

調査対象は、彼らが各週のトピックについて平均約25分間（分布15-35分）クラスメート同士ペアで自由に話し合い、それを各自がテープに録音した会話中の誤用である。

学習者の自己訂正は、「自分の間違いに気が付いたものを訂正する」ことを学習者に求めたが、提出を義務付けなかったため提出しなかった学習者や提出しない週がある学習者がいた。ここで取り上げたのは、自己訂正記録を3回以上提出した学習者の「自己訂正」である。なお、学習者の自己訂正の方法には制限を与えられていない。注1)

教師の誤用訂正は15人の学習者が参加した全ての会話中の誤用が集計された。自己訂正では学習者が自己訂正を行った会話の誤用のみが集計された。

2-2 対象者の日本語レベル

Cクラスの学習者には開講時と閉講時に日本語能力試験の2級「聴解」試験を行った。小林・フォード順子（1992）の実証的研究によれば、「文法力と文法項目の聴取能力は相関関係が非常に高い」。つまり、文法が理解できていない文は聞いても理解する事ができないということが分かった。ここでは対象者の日本語レベルを測る目安としてこの試験結果を用いた。2級「聴解」試験の得点が60パーセント以上を「上級」レベルとし、それ以下を「中級」レベルとした。但し、聴解テストが60パーセントに達していないが、明らかに「上級」と思われるもの、ならびに止むを得ない理由で試験を受けられなかった学習者のレベルは教師が判断した。「上級」学習者は5人、「中級」学習者は10人であり、そのうち「自己訂正」を行ったのは「上級」2人、「中級」8人である。

2-3 調査方法

(1) 教師が各週の録音会話を聞いて誤用を訂正し、

翌週それぞれの学習者にフィードバックした誤用を、個人別に誤用の具体例を分類し、集計した。

学期中の教師の聞き間違いや聞き落としを防ぐため、「教師の誤用訂正記録」及び「学習者の自己訂正記録」と照らし合わせながら会話録音テープを再度聴き直した。

(2) 学習者の自己訂正は、学習者がその週に録音した会話を自宅で聞き、気がついた誤用を訂正して翌週教師に提出したものの中で、(1)「誤りが、正しくまたは適切に訂正されていたもの」のみを「自己訂正」として分類、集計した。

学習者が教師に提出した「自己訂正」の中には、花城（1997）や石橋（2000）による日本語学習者の誤用自己訂正タイプの分類と同様に(2)「誤りではない部分を他の言葉での言い換えた」(3)「誤りに気づいたが正しく訂正できなかった」(4)「正しく用いられた部分を誤用と判断し、かえって間違った訂正をした」（筆者要約）がかなり含まれていた。石橋は学習者のモニター能力を研究対象としており(2)も「正しく自己訂正できた」としているが、本稿では、中上級学習者が自分の会話をモニターして見つけた誤用に対する自己訂正の傾向や割合を見たいとの理由から(1)のみを取り上げた。(2)、(3)、(4)は学習者ごとにその出現総数のみを数えた。

なお、教師の誤用訂正では、会話中に出てきた同じ間違いはそれぞれ誤用一回と見なして数えた。

ペアで会話した相手の誤用をも訂正して提出した学習者が3人いたが、今回は自分の誤用に対する訂正のみを「自己訂正」と見なして集計した。

誤用は「2-3-1」、「2-3-2」のように判断、分類して集計した。

2-3-1 誤用の判断基準

誤用の判断基準は、明らかな語彙や文法上の間違いの他、発音及び助詞の省略や欠落は教師が聞いて「不自然に感じられるもの」を誤用とした。

2-3-2 誤用の分類

誤用は先ず次の6つの言語項目に分類した。

- (1) 語彙、(2) 文法、(3) 助詞、
- (4) 文末、(5) その他、(6) 発音

(1)「語彙」は、語彙知識の不正確さや欠如から起こった誤用：例えば動詞の使用間違い（「来る」とすべきところを「行く」とした）・英語語彙での代用・数字、漢字の読み違いなど

(2)「文法」は、「助詞」、「文末」、「その他」を除いた文法項目（活用形・表現）の知識不足や正確さが原因で起こった誤用：例えば「イ-形容詞の過去形」「引用表現」

「文法」誤用の分類はその間違いの原因がどこにあるかを教師が判断して分類した。例えば、誤用が①動詞・形容詞などの活用形そのものを知らないためか、②それに接続する表現を知らない、または正確に知らない、またはその表現を知っているが、それに先立つ品詞の形を知らないために起こったのか、また①自動詞・他動詞の誤用か、②それに先立つ助詞の誤用か、などである。

- (3)「助詞」は助詞の使用間違い・欠落・過剰使用

(4)「文末」は文体の混用・文末のテンス・「です」と「ます」の使い間違いなど

(5)「その他」は①慣用表現など、語単位ではない表現の言い回しの誤用とそれを知らない場合、②間違いが含まれる文を、別の意味の文で訂正した場合（肯定を否定に変えるなど）

- (6)「発音」は教師が聞いて不自然に感じられる発音

以上の項目はその誤用の表れ方によってさらに次のように分類し集計した。（これらの項目を以後「種類」と呼ぶ）

- (1) 語彙：15種類
- (2) 文法：67種類

- (3) 助詞：47種類
- (4) 文末：5種類
- (5) 発音：7種類

3 調査結果と考察

3-1 誤用数と誤用率

表1から分かるように、「上級」学習者と「中級」学習者ではその1トピック当たりの誤用数には大きな差がある。誤用総数は、「上級」は1トピック当たり9.47個の誤用があったが、「中級」では16.06個の誤用があり、これは、「上級」の1.69倍に当たる。同様に、「文法」の誤用数は「中級」が「上級」の1.46倍、「語彙」では1.74倍、「助詞」では1.69倍、「発音」では2.01倍、「文末」では5.69倍、「その他」では1.75倍の誤用数があった。

では、誤用総数に対する各項目の誤用割合はどうか。表1から分かるように学習者の誤用は「文法」が最も多く、全誤用にしめる「文法」の割合はその36.0パーセントであった。次に「語彙」が24.3パーセント、「助詞」が23.7パーセント、「発音」が9.1パーセント、「文末」が3.9パーセント、「その他」が3.0パーセントと続く。

次に、「上級」学習者と「中級」学習者の誤用率はどうか。

「上級」の誤用率は「文法」が40.3パーセント、「語彙」と「助詞」が23.8パーセント、「発音」が7.9パーセント、「その他」が3.0パーセント、「文末」が1.3パーセントであった。

他方、「中級」の誤用率は「文法」が34.8パーセント、「語彙」が24.5パーセント、「助詞」が23.7パーセント、

表1 誤用の分類

学習者	トピック数	誤用総数	誤用種別					
			語彙	文法	助詞	文末	その他	発音
上級者(5名)	32	303	72	122	72	4	9	24
1トピック当たりの誤用		9.47	2.25	3.81	2.25	0.13	0.28	0.75
誤用比率		100%	23.8%	40.3%	23.8%	1.3%	3.0%	7.9%
中級者(10名)	68	1092	267	380	259	50	33	103
1トピック当たりの誤用		16.06	3.93	5.59	3.81	0.74	0.49	1.51
誤用比率		100%	24.5%	34.8%	23.7%	4.6%	3.0%	9.4%
合計	100	1395	339	502	331	54	42	127
誤用比率		100%	24.3%	36.0%	23.7%	3.9%	3.0%	9.1%

「発音」が9.4パーセント、「その他」が3.0パーセント、「文末」が4.6パーセントであった。

以上、誤用数の集計結果から分かったことは、

(1) 「上級」学習者の誤用数は全ての項目で、「中級」学習者に比べて明らかに少ないことである。それは比較的習得しやすい「文末」表現において最も顕著であり、また、個人的な差が大きいと考えられる発音誤用も、「上級」学習者では「中級」学習者に比べて大きく改善されていることが分かる。

(2) 誤用率を見てみると、「上級」学習者の「文法」誤用率が他の項目に比べて際立っている。「語彙」と「助詞」の誤用は同数、同率であったが、「文法」はその1.7倍の誤用があった。このことは、「上級」学習者(日本語能力試験「聴解」2級合格レベル)とは言え、会話で用いられる基礎的な「文法」にまだ問題点が残っていることを示している。
次に誤用の種類を見る。

3-2 誤用の種類と誤用数および誤用人数(15人中)

3-2-1 「語彙」

語彙の誤用は15種類あったが、次の6種類の誤用総数は全「語彙」誤用の85パーセントを占めている。

- 1) 英語語彙の代用 (26.5%) 12人
90誤用(上級:17誤用 中級:73誤用)
- 2) 間違った名詞使用 (24.4%) 14人
83誤用(上級:17 中級:66)
- 3) 間違った動詞使用 (17.9%) 14人
61誤用(上級:13 中級:48)
- 4) 間違った副詞使用 (6.7%) 11人
23誤用(上級:3 中級:20)
- 5) 語の欠落 (5%) :8人 17誤用(上級:2 中級:15)
- 6) 間違ったイ-形容詞使用 (4.7%) 12人
16誤用(上級:3 中級:13)

3-2-2 「文法」

文法の誤用は67種類あったが、次の10種類の誤用総数は全「文法」誤用数の56.7%を占めている。

- 1) 「～ている」 (9.5%) 12人

48誤用(上級:11 中級:37)

- 2) 可能形 (8.5%) 10人
43誤用(上級:1 中級:42)
- 3) 引用表現(主に「～と思います」) (7.9%) 11人
40誤用(上級:6 中級:34)
- 4) イ-形容詞の過去形 (6.3%) 10人
32誤用(上級:8 中級:24)
- 5) 名詞に接続するナ-形容詞 (4.9%) 11人
25誤用(上級:3 中級:22)
- 6) 他動詞を自動詞とした (4.9%) 11人
25誤用(上級:4 中級:21)
- 7) 受け身形: (4.3%) 11人
22誤用(上級:9 中級:13)
- 8) 動詞のた形にすべきところを辞書形にした (3.3%) 8人 17誤用(上級:4 中級:13)
- 9) 「いる／ある」 (3.3%) 9人
17誤用(上級:3 中級:14)
- 10) 「こ・そ・あ」 (3.1%) 7人
16誤用(上級:6 中級:10)

3-2-3 「助詞」

助詞の誤用は47種類があったが、次の7種類が全「助詞」誤用の50%を占めている。

- 1) 「の」以外の助詞の欠落 (10.5%) 13人
35誤用(上級:5 中級:30)
- 2) 「の」の欠落 (9.3%) 8人
31誤用(上級:2 中級:29)
- 3) 「の」の過剰使用(イ-形容詞+名詞) (6.9%) 7人 23誤用(上級:2 中級:21)
- 4) 「が」とすべきところに「を」使用: (6.9%) 7人
23誤用(上級:0 中級:23)
- 5) 「を」とすべきところに「が」使用 (6.0%) 12人
20誤用(上級:14 中級:6)
- 6) 「に」とすべきところに「で」使用 (6.0%) 10人
20誤用(上級:4 中級:16)
- 7) 「で」とすべきところに「に」使用(4.2%) 7人
14誤用(上級:5 中級:9)

3-2-4 「文末」

文末の誤用は5種類あったが、次の3種類が全「文末」誤用の88パーセントあまりを占めている。

- 1) 「丁寧体（です・ます）」にすべきところに「普通体」使用：(36.5%) 8人 19誤用（上級:5 中級:14）
- 2) 「です」にすべきところに「ます」使用またはその逆（27.4%） 8人 14誤用（上級:4 中級:10）
- 3) 「です・ます」の過去形にすべきところに現在形を使用（23.5%） 6人 12誤用（上級:1 中級:11）

3-2-5 「発音」

発音の誤用は7種類あったが、次の5種類が全「発音」誤用の87.4パーセントを占めている。

- 1) 長音が短い（25.1%） 9人

32誤用（上級:7 中級:25）

- 2) その他の発音誤用（18.8%） 7人

24誤用（上級:3 中級:21）

- 3) 撥音「ん」の欠落（17.3%） 8人

22誤用（上級:4 中級:18）

- 4) 「濁音」にすべきところに「清音」(13.3%) 8人

17誤用（上級:0 中級:17）

- 5) 促音「っ」の欠落：（12.5%） 8人

16誤用（上級:3 中級:13）

以上、学習者の会話に見られる誤用の種類は多いが、種類ごとの集計結果を見ると、多くの学習者に共通の誤用があり、誤用の多い種類の数はあまり多くないことが分かる。

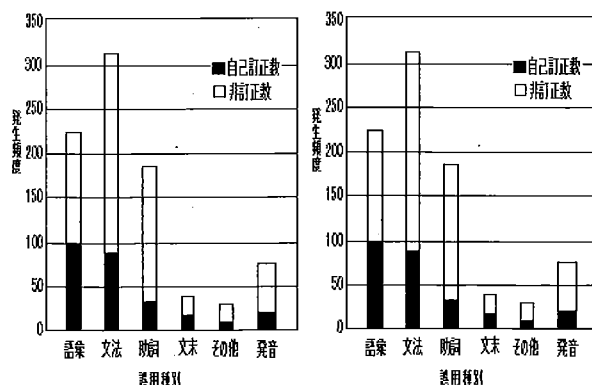
次に学習者の自己訂正について見る。

表2 誤用の分析

学習者 No.	レベル	トピック 数	誤用合計			誤用種別											
			誤用数	自己訂正	自己訂正 比率	語彙		文法		助詞		文末		その他		発音	
						誤用数	自己訂正	誤用数	自己訂正	誤用数	自己訂正	誤用数	自己訂正	誤用数	自己訂正	誤用数	自己訂正
A	上級	6	53	24	45.3%	16	8	21	10	9	1	0	0	3	3	4	2
B	上級	5	59	26	44.1%	25	13	20	6	9	3	3	2	1	0	1	0
C	中級	7	101	39	38.6%	30	18	43	12	17	5	1	1	2	1	8	2
D	中級	3	86	27	31.4%	10	5	19	7	27	9	4	3	1	0	25	3
E	中級	6	134	39	29.1%	35	17	52	14	29	3	0	0	3	0	15	5
F	中級	7	102	29	28.4%	33	7	31	9	18	4	9	6	4	0	7	3
G	中級	6	152	41	27.0%	36	17	66	14	32	2	5	3	5	0	8	5
H	中級	4	71	18	25.4%	13	8	31	6	15	3	9	1	1	0	2	0
I	中級	4	72	15	20.8%	20	4	18	5	20	4	7	0	4	2	3	0
J	中級	3	38	7	18.4%	7	3	12	1	11	1	2	1	3	1	3	0
合計			868	265		225	100	313	84	187	35	40	17	27	7	76	20
自己訂正比率				30.5%			44.4%		26.8%		18.7%		42.5%		25.9%		26.3%
誤用比率							25.9%		36.1%		21.5%		4.6%		3.1%		8.8%

3-3 自己訂正率

表2から分かるように自己訂正の対象となった会話での誤用は「文法」が最も多く、全誤用にしめる「文法」の割合はその36.1パーセント(35.9)であった。次に「語彙」が25.9パーセント(24.3)、「助詞」が21.5パーセント(23.7)、「発音」が8.8パーセント(9.1)、「文末」が4.6パーセント(3.8)、「その他」が3.1パーセント(3.0)と続く。これは15人の学習者の誤用率(括弧)と「助詞」で2.2パーセント、「語彙」で1.6パーセント差があるが、概して大きな差はないと言えよう。それに対する学習者の自己訂正率は表2及びグラフに示すように、高い順に「語彙」が44.4パーセント、



「文末」が42.5パーセント、「文法」が26.8パーセント、「発音」が26.3パーセント、「その他」が25.9パーセント、「助詞」が18.7パーセント、であった。

この結果から、学習者は「助詞」の誤用に最も気づきにくいことが分かった。10人の学習者の「助詞」誤用は47種類もあり、中上級レベルでも「助詞」誤用の克服はかなり難しいことが分かる。

次いで「発音」の訂正率が低い。「発音」誤用に関しては、「発音」に問題が多い学習者に漢字語彙の「ふりがな」をうってもらおうと、学習者は自分が発音する通りに「ふりがな」をうつことをしばしば経験する。その学習者にはその語彙はそう聞こえているわけであり、それを間違いだと気づいて訂正するためには忍耐強い訓練が要求される。

「文法」の訂正率が次いで低い。「文法」に関してこの調査で結果から分かったことは、「語彙」では誤用数が多かった種類は訂正率も高かったが、「文法」では多くの誤用があった種類の訂正率は逆に低かった。通常、会話で使われる文法は書き表す文章に比べると易しいものが多い。誤用が多かったのは初級期に学ぶ基礎的な文法であった。

教師は学習者の誤用を毎週添削してフィードバックしてきた。添削した誤用は翌週、訂正確認クイズを行っているが、その結果は大変良かった。「誤用の訂正確認クイズの正答率はきわめて高かったにもかかわらず、学習者はこの間に最も間違いやすい文法項目（種類）に対する自己訂正がさほど行えなかった」という不思議な現象がこの調査結果から分かった。坂本・小山（1997）は初級レベルで学習される文法項目の中から10項目を対象にして日本語学習者の文法修正能力を調査した結果、文法修正能力は「ただインプットに触れるだけでは身につけにくく、むしろ言語形式に焦点を当てた訓練を通しての方が身につけやすい。」と述べている。学習者の間違いの形を正しただけの教師の添削は学習者にとっては身につけにくいインプットであった可能性が高い。勿論、教師の添削を注意深く読み、次の会話ではその誤用を正していった学習者も少なからずあった。そのような学習者の存在を考慮した上で、なお、適切で正確な日本語運用には、中上級学習においても間違い易い「文法」項目や「助詞」を、その言語形式に焦点を当てて復習することがきわめて重要であることが分かった。

3-4 学習者の個別自己訂正率

次に学習者それぞれの自己訂正率を見てみると、「上級学習者」である学習者AとBがそれぞれ45.2パーセント、44.0パーセントであり、「中級学習者」に比べて明らかに訂正率が高いという結果が出た。「中級学習者」であるCは38.6パーセント、Dは31.3パーセント、Eは29.1パーセント、Fは28.4パーセント、Gは27.0パーセント、Hは25.4パーセント、Iは20.8パーセント、Jは18.4パーセントであった。

「中級学習者」Eは母国で日本語能力試験2級に合格しており、聴解試験では52パーセントの得点を取っている。それにもかかわらず、Eの訂正率は予想よりかなり低かった。Eは自分の録音会話を聞いた時、コメントも書いている。一部を引用すると、「自分の意思を整理した後で話すほうが良い」「話すときにすぐ興奮するくせもなおすようにしたい」と書いている。Eは確かに熱心に良く話し、正しく話すのではなく、話の内容に注意が向けられていたため多くの誤用があったと考えられる。しかしそれが、自宅で録音テープを聞きながらの自己訂正にどの程度影響を与えたかは分からない。

3-4-1 誤用の種類とその自己訂正率

3-4-1-1 「語彙」

- 1) 英語語彙の代用：9人 63誤用←40訂正(63.4%)
- 2) 間違った名詞使用：10人
61誤用←33訂正(54.0%)
- 3) 間違った動詞使用：10人
42誤用←17訂正(40.4%)
- 4) 間違った副詞使用：7人 16誤用←1訂正(6.2%)
- 5) 間違ったイ-形容詞使用：9人
11誤用←1訂正(9.0%)
- 6) 間違った序数詞使用：7人 7誤用←2訂正(28.5%)

以上の6種類が全「語彙」誤用の88パーセントを占めている。

3-4-1-2 「文法」

- 1) 引用表現（と思います）：6人

- 31誤用←6訂正 (19.3%)
- 2) ている：8人 25誤用←2訂正 (8.0%)
 - 3) 動詞の可能形：9人 23 誤用←6訂正 (26.0%)
 - 4) 名詞に接続するナ-形容詞：8人
19 誤用←6訂正 (31.5%)
 - 5) 動詞活用形（可能形、受身形、て・た形以外）
：6人 15誤用←9訂正 (60.0%)
 - 6) 他動詞を自動詞とした：7人
13 誤用←4訂正 (30.7%)
 - 7) 受け身形：7人 12 誤用←2訂正 (33.3%)
 - 8) 動詞のて・た形：6人 12誤用←3訂正(25.0%)
 - 9) イー形容詞の過去形：5人
12誤用←1訂正 (8.3%)
 - 10) いる／ある：6人 12誤用←5訂正 (41.6%)
- 以上の10種類が全「文法」誤用数の55.5%を占めている。

3-4-1-3 「助詞」

- 1) 「の」以外の助詞欠落：9人
26誤用←8訂正 (30.7%)
 - 2) 「が」とすべきところに「を」使用：7人
15 誤用←2訂正 (13.3%)
 - 3) 「に」とすべきところに「で」使用：9人
14誤用←2訂正 (14.2%)
 - 4) 「の」の欠落：7人 11 誤用←0訂正 (0%)
 - 5) 「に」とすべきところに「が」使用：6人
10 誤用←3訂正 (30.0%)
 - 6) 「の」の過剰使用：4人 9誤用←1訂正(11.1%)
- 以上の6種類が全「助詞」誤用の45.6%を占めている。

3-4-1-4 「文末」

- 1) 「です・ます体」にすべきところに「普通体」使用：
4人 17誤用←9訂正 (52.9%)
 - 2) 「です・ます」の過去形にすべきところに現在形
使用：4人 11誤用←4訂正 (36.3%)
- 2種類が全「文末」誤用の70パーセントを占めている。

3-4-1-5 「発音」

- 1) 長音が短い：5人 19誤用←5訂正 (26.5%)

- 2) その他の発音の誤用：7人
18誤用←4訂正 (22.2%)
 - 3) 撥音「ん」の欠落：4人 12誤用←0訂正 (0%)
 - 4) 「濁音」にすべきところに「清音」：4人
10誤用←5訂正 (50%)
 - 5) 促音「っ」の欠落：5人 8誤用←2訂正 (25%)
- 以上の5種類が全「発音」誤用の88.1パーセントを占めている。

3-5 自己訂正おけるその他の訂正

今回、(1)「誤りが、正しくまたは適切に訂正されていたもの」のみを「自己訂正」として分類、集計した。しかし、学習者が提出した自己訂正には(2)「誤りではない部分を他の言葉での言い換えた」(3)「誤りに気づいたが正しく訂正できなかった」(4)「正しく用いられた部分を誤用と判断し、返って間違った訂正をした」が、かなり含まれていた。その数を学習者ごとにまとめると次のようになる。

- 学習者A：(2) 22、(3) 1、(4) 1
 学習者B：(2) 17、(3) 1、(4) 1
 学習者C：(2) 3、(3) 4、(4) 2
 学習者D：(2) 2、(3) 0、(4) 1
 学習者E：(2) 27、(3) 8、(4) 3
 学習者F：(2) 0、(3) 2、(4) 1
 学習者G：(2) 7、(3) 10、(4) 1
 学習者H：(2) 6、(3) 3、(4) 0
 学習者I：(2) 2、(3) 2、(4) 2
 学習者J：(2) 2、(3) 1、(4) 1

「上級」レベルにある2人の学習者A,Bと、今回「中級」に分類されたが母国で日本語能力試験2級に合格している学習者Eの(2)の割合が他の学習者に比べて際立って多い。これは、日本語能力が高い学習者ほど、より適切な日本語表現を用いたいと考えて(2)の訂正をしたからだと考えられよう。

4 学習者の会話ストラテジー

学習者がその週に会話する相手は学習者の選択に任

されていた。彼らは最初の数週間でクラスの全員とペアを組み終えた後は、自由に相手を選び、かなり自由な会話をした。会話相手に慣れるに従い、会話時間が増え、リラックスした雰囲気や、笑い声がしばしば聞かれ、後半の会話は、もっと話したいが時間切れになるという状態であった。

レベル差が大きいペアでは、相手の間違いを正しく言い換えてリピートしたり、なかなか言葉が出てこない相手の言いたそうな言葉を、それとなく言って相手に助け舟を出す学習者もいた。一方では相手の助け舟を、「ちょっと待って」と自分が言いたい言葉を思い出すまで待つように促す学習者もあった。それとは逆に知らない言葉を、相手に教えてもらってそれを会話の中で数回使ってみる学習者があった。また、知らない言葉を電子辞書で調べながらも、かなり自然のスピードで話すことができる学習者も数人いた。

会話は、そのトピックに関する日本事情を確認した後、主に自国の事情を話すことが期待されていた。したがって、トピック「食生活」では中国人の学習者が多弁になり、「歴史」に詳しいトルコ人や中国人、コロンビア人などの学習者は自国の歴史上の英雄について詳しく説明した。

またトピックに沿って話す学習者が多い期と、トピックには関連してはいるが、個人的な事柄（恋愛や人生観など）に話が及びがちな期もあり、後者の場合は、正しく話すより話の内容に注意が向けられ、誤用も多くなる傾向があった。

Cクラスに奇数の学習者が在籍した期、あるいは欠席などでペアを組めない学習者が出たときは教師が学習者とペアと組んだ。教師はそれなりに会話を楽しみ、求められていた情報をやり取りする点では何の支障もなかったが、録音テープの聴取から分かったことは、学習者同士のペアのほうが、いわゆる話が弾んだ。嶋津（2003）は教室での教師と学生とのインタラクションをモニターし、「学生が自らインタラクションを展開する場合、「教師」と「学習者」とは異なる「話者」として役割が遂行され、参加者が平等に自己表現する可能性を提示した」。学習者同士のペアのほうが話が弾むのは、学習者が「平等」に「話者」とし

ての役割を果たしていたからだと考えられる。

5 まとめと今後の課題

本稿は、大阪大学留学生センター日本語研修コース「Cクラス」の中上級学習者を対象に、先ず、彼らが教室でクラスメートとペアで行ったトピック会話に見られる全誤用を分類、集計し、分析した。その結果、（1）誤用は「文法」、「語彙」、「助詞」、「発音」、「文末」、「その他」の順に多かった。

（2）学習者の誤用の種類は極めて多いが、多くの学習者の誤用は共通していた。そのため各分類の誤用数の上位数種類の誤用が全誤用に対して高い割合を占めていた。

（3）「中級」学習者に比べて「上級」学習者の誤用数はかなり少なかった。しかし、かれらの誤用全体に占める「文法」の割合は高く、上級学習者といえども「文法」にまだ問題点が残っている。

次に、15人の学習者のうち、自らの誤用の自己訂正を行った学習者10人を対象として、自己訂正を行った会話での全誤用を分類、集計し、それに対する自己訂正率を調べた。その結果、（4）訂正率の高いものから「語彙」、「文末」、「文法」、「発音」、「その他」、「助詞」の順であった。

（5）誤用の具体例（種類）の訂正率を見てみると、「語彙」では誤用の多かったもののほど訂正率が高かったが、「文法」では逆に低いものが多かった。（6）「上級」学習者は「中級」学習者に比べて自己訂正率が高かった。このことは、石橋（2000）の学習者の産出作文「モニタリングによる自己訂正数は日本語能力と関連している」との研究結果を、発話のモニターによる自己訂正でも裏付ける結果となった。

誤用の中で最もその数が多かった「文法」や「助詞」などの誤用については、教師のフィードバックが十分機能しなかった学習者があったが、今回の調査結果から、間違いやすい項目を、その言語形式に焦点を当てて教室で復習することがきわめて重要であるとの結論を得ることができた。

過去2年に渡って「討論クラス」を担当してきたが、

今回初めて学習者の誤用を分類、集計し、分かった事が多かった。特に学習者個々人の問題点が明らかになり、既に修了していった学習者に十分な指導ができなかった点が残念に思われる。今後は学期中に週ごとの誤用を集計して、学習者を効果的に援助していきたい。また、これまで学習者の自己訂正記録は教師の添削用紙と交換に受け取るだけにしていたが、今後は教師のそれと照らし合わせて、コメントするなど、より多くの学習者が自己訂正をしようとの意欲が持てるよう工夫する必要がある。

謝辞：本稿のデータをまとめるにあたり、お忙しいにもかかわらず、表、及びグラフ作成を手伝ってくださった小田博基氏、並びに本稿の初稿に目を通してくださり、ご助言をいただいた大阪大学留学生センター非常勤講師のスミス朋子先生に感謝申し上げます。

注

1. 訂正に際しては何を見ても良いし、級友に教えてもらっても良いとした。訂正作業から得られる強い印象による学習効果に「自己訂正」の目標を置いたからである。東保（2001）

参考文献

- (1) 石田玲子(2000)「日本語学習者の作文におけるモニター能力—産出作文の自己訂正から—」『日本語教育』106号, p.56-65
- (2) 小山悟（1996）「自律学習促進の一助としての自己評価」『日本語教育』88号, p.91-103
- (3) 坂本正・小山悟（1997）「日本語学習者の文法修正能力」『第二言語としての日本語の習得研究』1号, p.9-28
- (4) 本郷智子（2003）「中級レベルの学習者同士による誤用訂正活動—グループモニタリングの実際」『日本語教育』118号, p.96-105
- (5) 花城可武（1998）「日本語学習者の自己訂正能力—発話資料と文字化資料をもとに—」南山大学大学院修士論文
- (6) 小林典子・フォード順子(1992)「文法項目の音声聴取に関する実証的研究」『日本語教育』78号, p.167-177
- (7) 嶋津百代(2003)「クラスルーム・アイデンティティの共構築—教室インターアクションにおける教師と学生のアクトとスタンス—」『日本語教育』119号 p.11-20
- (8) 加藤好崇(1997)「日本語学習者の誤用に対する教師の非訂正行動」『日本語教育』93号, p.26-37
- (9) 田島ますみ（2004）「口頭産出測定のための正確さの指標—妥当性の検証と今後の研究課題—」『千葉大学留学生センター紀要第10号』p.22-38
- (10) 高見沢孟(1978)「中級会話の指導」『日本語教育』37号p.37-44
- (11) 豊田豊子（1998）「日本語教育における日本事情」『日本語教育』65号, p.16-29
- (12) 村木新次郎（1997）「語彙教育」『日本語教育』94号, p.75 -79
- (13) 水野晴光（1987）「日本語の中間言語」『日本語教育』62号, p.152 -164
- (14) 岡崎敏雄（1987）「談話の指導—初～中級を中心—」『日本語教育』62号p.165-178
- (15) j.v.ネウストプニー「インターアクションと日本語教育—今何が求められているか—」『日本語教育』112号p.1-14
- (16) 東保登紀代（2001）「フィードバックを重視した作文教育—誤用の自己訂正と作文分析シートの記入—」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第5号, p.127-142
- (17) 東保登紀代（1998）「作文に見られる学習者のストラテジー」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第2号, p.77-93